
Lv20

mori

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LV20

【Nコード】

N8167Y

【作者名】

mori

【あらすじ】

LVが20までしか上がらない、勇者にはなれない主人公が勇者や仲間と共に魔王討伐を目指すお話です。主人公の戦い方はむしろFFよりになるかもしれません。重い話はきっと最初の方だけのハズ。

第一話（前書き）

初めての作品です。

誤字脱字、駄文等あるでしょうが完結目指していくのでよろしくお
願いします。

第一話

誰だって一度は「主人公」に憧れたことがあるだろう。

一国一城の主となる「王様」。

世界を股にかけ未知の秘境や宝を探しだす「冒険家」。

魔物はびこる城にて運命の相手を待ちわびる「お姫様」。

そして魔物より姫を救い出し、世界を平和へと導く「勇者」。

きっと誰もが自分もこうなってみたいと夢を見る。

しかし人生を生きていく中で自分の力を知り、妥協点を見つけていく。

そしてその中で幸せを掴んでいく。

それは当然のこと、だって誰もが「主人公」になれるわけではないのだから。

ここはとある城下町の一角にある民家。

今まさにここで新しい命が産まれようとしていた。

…… おぎゃあ!! おぎゃあ!!

バンッ!という勢いの良い音と共にドアが開かれる。

「産まれたか! レイ!」

青いバンダナを巻いた青年がベッドに横たわる女性に声をかける。

「ええ、無事に産まれたわあなた〜。」

「そうか！頑張ったな！」

それを聞いた青年は妻に抱きつきたい衝動に駆られるが、さすがに出産直後にそれはまずいだろうと思い留まる。

ふと目をやると部屋の机の上で産婆の手により産湯に浸かる我が子を見つける、近づいていくと産婆は青年に気づき笑顔で声をかける。

「元気な男の子ですよ、レイさんも健康そのものです。」

「ああ、ありがとう！助かったよ婆さん。」

やがて赤ん坊、妻に対する処置も終わり産婆が帰っていった。部屋に残ったのは青年とその妻、そしてその2人の愛の結晶のみ。母に抱かれ眠るわが子を見ながら青年は立ち上がり言った。

「お前とこの子はどんなことがあっても、絶対に守ってみせる！」

「あらあら別に危険なわけでもないのに〜、でも嬉しいわ、うふふつ、それで名前は決めているの〜？」

夫の言葉に頬を染めながらも嬉しそうな顔で妻は答える。

「もちろん決めてるさ、この子の名前は…」

これが後の世に魔王を打倒する勇者…の仲間であり、
自分の力を決して諦めなかった一人の人間の物語のはじまりの日で
ある。

第二話

「ふう……」

日課となっている走り込みを終えて、汗を拭きつつ家に向かう。

ここは世界の南に位置する大陸にある城、アリアハン。かつては全ての大陸を支配する大国であったが、

過去に起きた戦争が原因で現在は他国との交流を絶っている……らしい。

その城下町の外れにある民家、表札には「ロック&レイ&amp;ウイル」と書いてある。

「ただいまー。」

「あらゝおかえりなさいウイル、パパを起こしてきてくれない？朝ごはんにしましょう。」

そう言われて俺は寝室へ向かう。

そこにはもう年齢はおっさんなのに青年にしか見えない男が一人。ありえない寝相で幸せそうな顔をして寝ている。

「父さん、朝ごはんの時間だよ、起きて。」

「うーん……あいつに報酬を渡すまえに脱出するわけには……」

訳のわからない寝言を言っただけで一向に起きる気配がない。

大きな声を出しても揺すっても全く起きない、

はあ……仕方ない、あの方法で行くか。

「あ！あそこにまだ見ぬお宝」どこだ！」あ、起きた。」

ガバアツ！と今まで爆睡していたにも関わらず勢い良く跳ね起きる。

「父さんおはよう、もうごはんの時間だから、母さんも待つてるよ。」

「

あ、あれ…？お宝は…？あいつは…？と寝ぼけている父さんをおいて居間に向かう。

食卓にはすでにトースト、サラダ、スープなどの色とりどりの朝食が用意してあった。

母さんはすでに椅子に座って待っていて、あとは父さんが来るのを待つだけだ。

それにしても母さんも年齢的には父さんと同じはずなのに見た目は少女そのもの、

街で姉弟に間違われたこともある、我が両親ながら一体この二人は何者なんだろうか？

「どうしたの…？ぼーっとして？」

い、いや、なんでもないよと席に着く。心を読まれたら困るからなこの前うっかり口が滑って年齢の話をしたらすごい笑顔で「体いいのよ」

と苦さが限界突破したスープを飲まされた時は心から後悔した。

少しして父さんも席につき、3人で手をあわせて唱和する。

「いただきます。」

なんでも父さんが以前東の国に旅をした時そこでの風習であつたそうで、

命をいただく際の礼儀、ということでは我が家でも行なっている。

「今日もレイの飯はうまいな！一日の活力だ！」

「うふふ、そう言ってもらえると作りがいがあるわ。」

と、いただきますと礼儀よくはじめた割にはすごい勢いで朝食を平らげる父と、

それをにこにこ嬉しそうに見つめながら食べる母、マイペースで食す自分。

結婚してからもう10年以上経つのにこの二人、未だにラブラブである。

食事が終了すると再び手をあわせて唱和する。

「ごちそうさまでした。」

これも東の国の風習で、感謝の気持ちを表すそうだ。

食器を片付けていると父さんが「準備ができたなら外にこいよ。」と言って出ていく。

少しは自分で片付けなよと思いつつも父さんの分も片付け、母さんに行ってきますと行って外に出ていく。

これがいつもの我が家の朝のである。

第二話（後書き）

とりあえず日常。

第三話（前書き）

ちょっとシリアス？

第三話

この世界には「加護」といわれるものがある。

なんでも生まれながらにして神から授かる力らしく、

その力によって身体能力の強化、呪文と呼ばれる奇跡を使うことができる。

「加護」は魔物と戦うことでのみ経験をつむことができ、

一定の経験をつむことで「加護」の力が強まり、より強い力を得ることができる。

しかしながらこの「加護」は全てのものに等しく…なんてことはなく、しっかりと個体差があるのである。それを昔々にどこぞの学者が発見し、「加護」の強さを最大Lvという概念で設定した。

そしてそれは「加護」の強さがその人間の強さの素質であるという風習を定着させた。

産まれたときに最大Lvを測定し、その子が戦うことが出来るかを見極められるのである。

もちろん加護の力がなくても日常生活を送るのになんら不便はない、あくまで魔物と戦うための超人的な力を手に入れるための手段なのである。

一般的な人で大体最大Lv60～70、素質の高い人で最大Lv80前後。

最大Lvが90を超える人はほとんどおらず、いわゆる「英雄」の素質を持つ人達である。

そんな中今も世界的に有名な冒険家である父ロック。

元魔法使いにして各方面に音に聞こえた研究者であった母レイ。

最大Lv96と最大Lv88の間に生まれた息子である俺ウィルは周囲の期待も大きかったらしい。

国王の前での最大Lv測定には多くの人々が注目していた。

しかし結果は思わず国王でさえ絶句してしまうものとなってしまう。

「Lv:20:？」

誰ともなくそうつぶやいた、そう、俺は「加護」の力が極端に弱かったのである。

低い人でもLv50はあるであろう「加護」が今までにない低さだったのだ。

当然のごとく周りからは「かわいそうに…」とか「残念でしたな…」との声が上がリ、

国王からも「あまり気にやまないように」と慰めの言葉が出た。しかし父ロックは大声で言い放った。

「別にあんたたちの慰めの言葉も同情の言葉もいらない！どんなことがあるうともこの子は俺たちの子供に変わりはなく、そこに「加護」の力は関係ない！」

母レイがそれに続く。

「そうですよ、ウィルは私達の息子、それは神にすら変えられない。それに「加護」の力が全てではないですからね。」

二人にそう言われた人達は何も言い返すことが出来ず、帰っていく夫婦を見送った。

しかしこの測定は多数の人に見られていた為にすぐに話が広まることになった。

「ロックとレイの息子ウィルは最大Lvが20しかない」

そのせいか昔から俺は周囲の子供たちにはいじめられ、大人達からは同情の視線を向けられて生活することになった。お使いで街に出れば、

「やーい、お前弱いんだってなー!」「(ヒソヒソ...)」ご両親はあんなに立派なのにねえ。」

と罵詈雑言のオンパレード、当然友達など出来ず一人でいることが多かった。

偉大な両親に不釣り合いな自分、どうして自分はこんなに弱いんだろう?なんで自分はこんな思いをしなければならないんだろう?そんな葛藤を感じていた時に言われた一言。

「お前本当はあの二人の子供じゃないんじゃないのか!」

当時の俺にはその言葉が心に強く突き刺さった。そんなことはない、と自分に言い聞かせながらもじわじわと広がっていく不安。

でも自分はこんなに弱いし、もしかしたらそうなのかも...

不安が疑念を呼び、とうとう両親に聞いてしまった。

「ねえ?本当に僕はお父さんとお母さんの息子なの?もし違うのなら正直に...」

とまで言ったところで頬に強い衝撃を感じると共に自分が吹き飛んでいることに気づく。

どうやら父さんに殴られ、壁に体を打ち付けたようで、鈍い痛みを感じながら薄れゆく視界の先に怒った顔の父と涙目の母を捉えながら意識を失った。

どれだけの時間が経ったのかはわからないが、目を覚ました時まず目に入ったのが母さんの顔だった、どうやら膝枕されていたらしい。

「やっと目を覚ましたわね、パパのはやりすぎだとは思うけどそれも仕方ないこと、それだけ怒っていたってことよ。」

あんなことを言ってしまった後だ、今更どんな顔をしていいかわからず思わず母さんから目をそらす。ふと部屋の隅に目をやると正座して首から“反省中”の札をぶら下げている父さんがいた。どうやら母さんからお仕置きされているらしい、と思っていると急にぎゅっと抱きしめられた。

「ウィル…周りがなんと言おうともあなたは私達の息子、それだけは疑わないで、そんな悲しい事を私たちに言わせないで…」

ふるえる声で俺を抱きしめながらそう言う母さん。

父さんも俺の目を見ながら言った。

「母さんの言うとおりだ！周りの目なんか気にするな！たとえ世界が敵に回ったってお前を、お前たちを守ってみせる！」

そんな父さんに、正座してなければかつこいいのにと思いながらも父と母の言葉に、嬉しさがこみ上げ、次に両親を少しでも疑ってしまった自分が恥ずかしく大声で泣きながら謝った。

そしてこの二人にの間に生まれたことを誇りに思った。
どんなことがあっても二人は自分の味方でいてくれる、そう思うだけで強くなれる気がした。

それから何か言われても気にならなくなった、自分の中に揺るがないものがあるから。

そうなる周りは興味を失うのか次第にいじめなどもなくなっていった、友達は相変わらずいなかったが。

その頃から俺は父さんに戦い方を習うことにした、Lvだけが強さではないということを自分の力で証明したかったのだ。

もちろん父さんは二つ返事で承、パパだけずるい！と母さんから炊事洗濯や

研究者であつた時に培った知識、技術などを教えてもらうことになった。

そういえばその生活になればじめた時だったな、あいつと出会ったのは…

第三話（後書き）

次回勇者が出ます。

第四話（前書き）

まだちょっとシリ阿斯？

第四話

それは両親から様々な技術を習っているある日のことだった。

父さんは戦闘もこなすが、基本的にはとうぞく（本人はトレジャーハンターと言い切っている）なので、

どちらかと言えば宝を探したり、敵から物をかすめ取る方が得意である。

ちなみにとうぞくが「加護」によって覚えることのできる呪文はフロミとレミラーマの2種類である。

フロミは自分の現在地の名称と階層を知ることができる呪文。

レミラーマは周囲に落ちている宝を発見することができる呪文である。

ぶっちゃけ戦闘には全く役に立たないがフロミは地図と併用すれば迷子になりづらくなるし、レミラーマは小銭を拾い集めたりするのに役立つそうだ。

そんなことを自慢気に話す父さん、なんというか…有名な冒険家なのにみみっちいぞ。

しかも迷子って…そういえばこの前北は上、南は下とか言ってたようないきがする、うん、忘れよう。

母さんいわくレミラーマはLv20で覚えられるので限界まで鍛えれば俺でも覚えられるそうだ。

ただしかしこさによって前後するため勉強は欠かさないほうがいいと言われている。

父さんはLv23で覚えたと言っていたがもしかしくなくても父さんはバカなのか？

なんてことをすっかり口走ってしまったのが運の尽き、いい笑顔の父さんに、

「今日はこの花を探してきてもらおうかな!」

と図鑑で初めて見る花を探してくるよう言われた。

どこに咲いているかなどは全く教えてくれず、漠然とこの近辺にあるとしか言ってくれなかった。

かしこいウィルなら俺の力なんぞなくても探し当てるだろう!

と完全に根に持っているようである。みみっちい…。

まあここらにあるならそんなに苦労しなくても見つけられるだろう、と探索に向かった。

「完全に甘く見ていた…」

外はすでに夕暮れ時、朝一番で出かけた俺は自分の見通しの甘さを嘆いていた。

花は確かにそこまで遠くない場所にあり、昼前には見つけることができた。

ただ咲いていた場所が問題だった。

「まさか崖の中腹にあるとは」

そう、そこまで断崖ではないが崖の途中にひっそりと咲いていたのだ。

もちろん上から飛び降りて見事着地!なんて訳にはいかない。

うつかり失敗すれば怪我だってするし下手すれば命が危ない。

どんな高いところから落ちてでもドシャア！という音のみで無傷なのは狩人さんだけだ。

あの人達はきつと特殊な訓練を受けているんだ。

仕方なく父さんからもらったばかりのロープを近くの木に括りつけ
ゆっくり降りていく、

そうなることを見越してロープを渡したに違いない、後で母さんに
報告しよう。

花が咲いているのは2本しかなかったため、それらを懐に入れ、傷
つけないようロープを登る。

そのせいで思った以上に時間がかかってしまったわけである。今は
家路を急いでいる。

ふとその途中通りがかった川辺で一人の子供が佇んでいるのを見つ
けた。

別に無視しても良かったのだが、こんな時間に一人は危ないし、何
故か声をかけなければという気になった。

「ねえ、君、どうしたの？」

声をかけるとその子は一瞬ビクツとなったあとこっちを見て、笑顔
で言った。

「ちょっと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行ってたんだ。」

お父さんの…そうなんだ…と複雑そうな顔でその子は呟く、気まず
く思ったのか

君の名前は？と聞いてきたのでウィルだよと言っておいた、こちらが聞き返すと

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

なんかいきなりホントに知らないの？みたいな顔をされたのでちよつとむつときた俺は

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

意趣返しのもりで言い返してやった、というか女の子と思ってたのは事実だ。

身長は俺より少し低めで中性的な顔立ち、つややかな黒髪を長めにのばしている、うんやっぱどう見ても女だ。

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

頬をつつすら赤くしながらぷうつとふくらませて言うな、いよいよ女にしか見えない。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

そついうとその子は大きく目を見開いた後、次第にうつすらと目に涙を溜めながら…ってなんで泣く！？

「ボクは…ぐすつ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

それから泣いているアリストを慰めながら彼の話を聞いていた。

なんでも彼の父はオルテガといってアリアハン屈指の戦士だったらしい。

最大Lvは97、うちの父さんよりも高かったらしく、宮廷内にも相手になるものはいなかったそうだ。

そんな折、魔物たちの動きが活性化した時期があり、原因の解決のためオルテガは一人で調査に向かった。

そして火山で魔物と戦い帰らぬ人となっただけらしい。らしいというのはあくまで噂だからである。

父がダメならその息子と目を付けられたのがアリストらしく、小さい頃から「オルテガの息子」という肩書きで育ってきた。母、祖父からも「あの人の息子、孫」とまるで自分は父の代替品のような扱いを受けていたらしい。

偉大なる英雄の息子として、表面上は立派な「息子」としての自分を演じてきたが、その内はかなり寂しかったらしい。

そこにいきなりポンと現れた俺が「父とは関係なく君のことを知りたい」と言ったことで心の抑えが壊れたのだろう。

何度も急に泣いたりしてごめんねと謝ってきていた。

でも俺はその時全く別のことを考えていた。

…そうか、こいつは俺と同じなんだ。

俺の場合は両親がいたから孤独を感じても自分を壊さずにすんだ、でもアリストは…？

親にすら自分を見てもらえず、今までそれを誰にも悟られないよう生きてきた。

それは想像以上につらいことであり、少なくとも子供がすべきことではない。

だから俺は、アリストを抱きしめながら言った。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一緒にいてあげるから。」

少しでも寂しさがなくなるように、自分と同じ思いをさせないために心を込めてそう告げる。

すると今まで泣いていたアリストの涙がぴたと止まり、顔が赤くなっていた、

きつと泣きはらした後だからだろう。とりあえず泣き止んだなら大丈夫だと思い体を離す。

「これから俺と友だちになろう、オルテガの息子じゃない、ひとりのアリストとして、そうだ、さっき採ってきた花、これあげるよ、友達の印だ。」

するとアリストはえっ？この花って…と戸惑いながらもこちらを見ながら花の咲くような笑顔で言った。

「うん！これからよろしくね！ウィル！」

時間もすっかり夜になってしまったのでとりあえずアリストと別れた、また明日ね！と言って。

実は俺にとっても初めての友達だったため内心かなり嬉しかったりしていた。

ウキウキ気分で家に帰るとそこには鬼が待っていた。

「あらら〜ウィル〜随分楽しそうね〜、何して遊んでたのかしら〜？」

いつもより口調が間延びしている母さんは確実に怒っている、経験がそう告げている。

というか後ろに禍々しいオーラをまとっている、ぶっちゃけチビリそっだ。

こうなったら覚悟を決めるしかないと今日手に入れた花を前に出しながら、

「ごめんなさい！どうしてもこれを母さんにプレゼントしたくて！」

と言った。もうどうにでもなれ！

すると感じていた威圧感が薄れ、恐る恐る顔を上げると、そこには満面の笑みの母さんが。

「私がこの花大好きなの知ってたの〜？嬉しいわ〜。」

なんとか俺は今日も生き残れそうである。

「でもいくら母さんのためとはいえあんまり危ないことしちゃダメよ〜。さ〜て、パパ〜？確かこの花って崖に咲いてたわよね〜？なんでウィルが持ってくるのかしら〜？え？ウィルが勝手に行ったって？じゃあウィルの持つてるパパのロープはなんなのかしら〜？ウィル？そのロープ貸してくれない？じゃあパパ行きましようか〜、え、どこに？うふふ〜。」

そう言っただけで母さんに連れて行かれる父さん、俺は何も見えていない。

今日は色々と疲れたし、早く寝て明日に備えよう！

第四話（後書き）

狩人さんは架空の存在です。

第五話（前書き）

まだシリ阿斯気味かも…

第五話

ボクの名前はアリスト、偉大なる英雄「オルテガ」の息子だ。小さい時からそうだった、どこに言っても誰と話しても必ず、

「オルテガの息子」

というフレーズがついてくる。

お母さんやおじいちゃんですえも

「あの人の息子、あいつの息子でわしの孫」

と日に何度も言い聞かせるようにボクに言ってくる。

でもボクの名前は呼んでくれない、最後に名前を呼んでくれたのはいつだろう？

ボクにはあまりお父さんの記憶というのがない、小さい時にいなくなってしまったから。

正直に言うパンツ一丁にマントのむさくるしいおっさんぐらいの印象しかない。

だって会話もほとんどしたことがないから。

一度だけお父さんと一緒に街に出かけたことがある、断片的にしか思い出せないけれど。

その時も覚えているのは周りの人達がボクを「オルテガの息子」としか見ていなかったこと。

ただお父さんの顔がずっとバツの悪そうな表情だったのだけは今も忘れられない。

そして帰り道にボクを抱き上げていった言葉。

「お前は…ワシの息子だ、…その前に…であることを忘れるな、例え…なんと…とも。」

あの時お父さんはなんて言っただろう？あの時は早く帰りたくてほとんど聞いていなかった気がする。そのすぐ後にお父さんは魔物退治に行つて、そのまま帰つて来なかった。

本当はいけないことだつてわかっているんだけどボクはその時確かに

「嬉しい」と思つてしまつたんだ。

だつてこれでもうお父さんと比べられることはないと思つたから、ボクはアリストとして生きていけると思つたから。でも現実とは違つた。

国はお父さんのかわりにボクに白羽の矢を立てた、父のカタキは息子が取るべきだとして。

それから周囲の目が本格的に「オルテガの息子」としてボクを見るようになった。でもそれをボクは受け入れた、きっとこれはお父さんがいなくなつてもいいと思つた罰なんだと。

だからこれからはお父さんの息子として生きていかなければならないんだと。

でもやっぱり寂しい、その気持ちは変わらない。

寂しさを紛らわせるためによくボクは一人で川辺に佇むことが多くなつた。

一人なら誰にも気を使ふ必要がないから。

でもそんな時だつた、彼が現れたのは。

その日もいつものように川を見ながらぼーっとしていた。

ここは滅多に人が来ないからお気に入りの場所だ、っただけど…

「ねえ、君、どうしたの？」

急に声をかけられてびっくりする、本当は今人と話したくなかったんだけど、

ボクはオルテガの息子、無視なんてしようものなら周りから何と言われてしまかわからない、だからいつもの様に作り笑顔で

「ちょっと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

この時はなんで会話を続けようと思ったかは自分でもわからない、結果的にそれがいい方向に向かったんだけど。

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行ってたんだ。」

その言葉を聞いて思わず顔をしかめてしまう。

こんな時間まで父親に頼まれたことに縛られるなんて、彼も父のことで苦労してるのかなと今思えば的はずれなことを考えていた。

流れを変えるために名前を聞いたらウィルと答えてくれた。
逆にボクの名前を聞いてきたので思わず焦ってしまい

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

と言ってしまった、確かにボクの名前を知っている人は少ないかもしれない、ほとんど聞かれたことがないから、でもみんなボクのこととは知ってると思っていた。

すると彼はちよつとむつとした様子で

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

ええ！？ここに住んでてお父さんを知らないの！？

というかボクが女の子って、ええ！？

色々と驚きすぎて気が動転していたボクは

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

と演技するのも忘れて素の感情を出してしまった。

でもそんなことを気にするでもなく彼は言った。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

その言葉を聞いて世界が一瞬止まる、…え？今、なんて言ったの？

ボクの名前を知りたい？お父さんとは関係なく？ボク自身の名前を

…？

ボクに興味を持ってくれた？ボクを知りたいと思ってくれた？

ただ一言アリストだよ、そういえばいいだけのはずなのに、頭がそれを理解したときにはもうダメだった、目頭が勝手に熱くなっていき

「ボクは…ぐすつ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

気づけば泣いていた。

それから感情を抑えられなくなったボクは彼に次々と話をした。自分は偉大な戦士の息子として生まれたこと。

みんな偉大な父だけを見ていて自分を見えてくれないこと。

父が帰らぬ人となってからは「立派な息子」を演じてきたこと。ずっと寂しかったことなどを泣きながら、謝りながら。

きつと変なやつだと思ってるよね、鬱陶しいと思われてるんだろうね…

初めてボク自身に興味を持ってくれたっていうだけなのに、勝手に何でも聞いてくれると勘違いして、彼にとつてはどうでもいい話をひたすら話しかけてる自分に自己嫌悪を覚えていた。

もう少ししたら元に戻るから、そうすればもうきつと君と話すこともないだろうから、ちょっとだけ我慢してね。

そう思っていたら急に彼に抱きしめられ、ささやかれた。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一生そばにいてあげるから。」

今ボクは自分の部屋のベッドの上で寝転んでいる。

机の上には彼が去り際にくれた花、それを見ていると自然と頬が緩む。

ボクにできた初めての友達、「オルテガの息子」ではなくアリストをみてくれる本当の友達…

でもなんでだろう？友達という言葉がしっくりこない。こんなに胸はときどきして顔は熱くなるのに。

でもいいや、明日また会ったら考えよう。

また明日！彼・・・ウィルが言った言葉を思い出し布団に入る。
今日はよく眠れそうだ！

花瓶の中の胡蝶蘭の花だけがそんな彼を見ていた。

第五話（後書き）

ウィルのセリフが微妙に違うのはアリストの聞き間違いです。

胡蝶蘭はよくわからないけどとりあえず調べた花言葉w

そして早くもストックが無いのでこれからはでき次第になります。

第六話（前書き）

第一話から第五話までも見やすくなればとちょっと変えたりしてるので良ければそちらもご覧ください。

第六話

今日も朝から日課となっている走り込み。
ただ今までとは変わった部分がある。

「おはよう！ウィル！」

「おはよう、アリスト。」

アリストが参加するようになったのである。
あれから俺たちは一緒に遊ぶようになり、お互いを知ることになった。

もちろん俺が最大Lv20までしか上がらないことも伝え、
それでも強くなれることを証明するため努力していると伝え、
何やら考えはじめていたようだが、ある日。

「ボクも参加してもいいかな？」

と聞いてきた。

俺としては一人よりもよっぽど楽しいし、
願っても無いことなので了承したが、なんでまたと理由を聞いてみると。

「ウィルのことをもっと知りたいし、守ってあげたいから。」

と嬉しさ半分、複雑さ半分の回答が帰ってきた。
俺に興味を持つてくれるのは嬉しいのだけれども、
やはり面と向かって弱いと言われているような気がするし、

同じ男として守ってもらうのにはプライドがあるわけだ。

まあそこは俺が守ってもらう必要がないくらいに強くなればいい、ということとで自己完結した。

ちなみにこのアリストさん、「加護」による最大Lvを聞いてみたところ、なんと最大Lv???らしい。

ということは魔物と戦えば戦うほど強くなる?限界がない?

こいつはもしかして「勇者」なんじゃないだろうか?

なんて反則キャラなんだとさすがに嫉妬を覚えたが、アリスト自身はいいやつだし、特にその力で増長するようなこともしない、むしろ、こんな強い力があることに嫌気がさしていたようだ。

それにこればかりは生まれつきなんだから責めるわけにもいかない。

悪いのは全部「加護」だ、うん。俺神様のこと嫌いになりそう。

現時点では魔物との戦闘なんてしていないため特に差はない、むしろ先に訓練をはじめていた俺のほうがちょっと上なくらいだ。

走りこみを終わると家に一旦帰る、もちろんアリストと一緒にだ。

最近は食事もうちでとっていくことが多い。

初めてうちに来た時自分の家がいいのかと聞いたところ、

「鍛錬で出かけるって言えば、さすがはあの人の息子だ、で納得してくれるから。」

と少しだけ寂しそうな笑顔で言った。

なのでそれ以上は問わず、好きなだけ食べていけばいいとだけ言うておいた。

最初は両親を多少警戒していたアリストだったが、

「お、初めて見る顔だな！とうとうウィルにも友達ができたか！レイ！今日はめでたい日だ、セキハンを炊くんのだ！」

「あらあら、いらつしゃい、ゆつくりしていつてね、セキハンはないけど腕によりをかけるわね。」

と、想像以上の歓迎ムードに逆に一瞬引いてしまったらしいが、すぐに打ち解けていた。

てかセキハンて何さ？と聞いたらなんでも東の国でめでたいことがあった時に作る真っ赤な料理らしい、うまいのが全くわからん。それにしても父さん東の国好きだなー。

「いただきます。」

合わせる手の数が4つになった食卓で今日も朝食がはじまる。本日のメニューはトースト、サラダにくろこしょうと呼ばれるピリツとした風味の香辛料がふんだんに使われたベーコンエッグ。

余談だが我が家では割と普通に使われていたこれが、後に国の王が欲しがるほどの貴重品だと知ったときは本気で驚いたものである。

相変わらずすごい勢いで平らげる父とそれをにこにこ嬉しそうに見つめる母。

マイペースに食べる俺、全くもっていつもの光景に今はアリストが加わる。

はじめはくろこしょうの独特の刺激に驚いていたが、気に入ったのか今はくろこしょうだけつまんで風味を楽しんでいるようだ。

あ、アリスト、そのジャムとってー。

「はいどうぞ、ウィル。」

ありがとー、やっぱり食事は大勢のほうが楽しいな。

「そうだね、ボクこんなに食事が楽しいなんて感じたこと今までなかったよ。あ、ウィル、口の横汚れてるよ？」

「あらあら甲斐甲斐しいわね。きっとアリストちゃんはいいいお嫁さんになれるわよ。」

と口の横どころか鼻の頭まで汚れてる父さんの顔を拭きながら言う母さん、父さん…犬かよ…

そして母さん、前提が間違ってるから、アリストは男だから。出会って速攻女と勘違いした俺が言えたセリフじゃないけど。ほら、アリストもなんか言ってやれよ。

「え！？そ、そんな照れちゃいますよ…それにボクはまだウィルとは…」

照れるなよ、お前自分が女だって言われてるんだぞ？俺の時は怒ってたじゃないか。

後最後のほう聞き取れなかったんだけどなんて言ったの？

「な、なんでもないよ！ほら、さっさと食べちゃおう！」

とがつつき出すアリスト、それを見ながらにこーと微笑む母、そして早くも外に向かっている父、意味がわからん。

あと父さん、食器いい加減片付けようよ…

side レイ

うふふ、アリストちゃんのウィルを見る目つき、アレは完全に恋する乙女の目ね。

さすがのロックも気づいたみたいだし、肝心のウィルは全くわかってなかったみたいけど。

はあ、あの子も父親似で罪作りな子になりそうね。

それにしてもアリストちゃんは男の子のはずなのになんでか大丈夫だっと思っちゃったのよね。

これはもう女の勘！てやつかしら。

まあいざとなったら本当の家族になっちゃえばいいだけだし、ロックを説得する準備をしておかないとね。

楽しくなってきたわ、うふふ。

side ロック

うーん、アリストはどうやらウィルを異性として見ているみたいだな。

思わず言っしまいそうになったがレイからオーラを感じて思わず逃げてしまった。

それにしても性別の問題はどうするつもりなんだ？

家族として迎えるのは構わんがさすがに嫁にするのはどうかと思うぞ？

まあとりあえずはウィルも気づいていないみたいだし今は置いておくか。

そろそろ冒険の虫がうずきだしてきたなー。

第六話（後書き）

まだまだ冒険に出る気配がない…

しばらくは日常での内容が続くと思います。

冒険を期待されている方には申し訳ないですがもう少しお待ちください。

第七話（前書き）

今までで最長、というか完全に説明回です。

第七話

以前「加護」の力によって呪文が使えるようになることは説明したと思う。

これは魔物を倒し経験を積み、Lvが一定の値に達した時、自然と頭の中に使い方が浮かび上がってくるのだそうだ。

だからといってレベルが上がるたびにポンポンと呪文を覚えるわけではない。

村人Aがレベル99になった所で、畑仕事には役立つかもしれないが所詮は村人、そこまで強くはならないし呪文も覚ええない。

では呪文を覚えるにはどうすればいいか、それは教会での特殊な契約が必要となるのである。

16歳になった時を起点に、以後は好きなタイミングで「しょくぎよう」を選択することができる。

その選択したしょくぎよう、つまりは契約の内容によって神からの「加護」の形が変わる。

呪文は覚ええないが肉体の強化が一番強力で、重装備によるパーティの壁となる「せんし」。

せんしよりも攻撃的な強化がされ、特に徒手空拳による戦闘を得意とする「ぶとうか」。

肉体の強化は弱いものの、数多くの呪文による戦闘を行える「まほうつかい」。

神の奇跡の力を最も強く受け、癒しの呪文による補助を長所とする「そつりよ」。

魔物から多くのゴールドを見つけたり、よりよい商品を見抜く目利きが特徴の「しょうにん」。

すばやさによるアイテム奪取や、旅をする上でのさまざまな補助が可能な「とうぞく」。

強化はほぼないが、行動を起こすたびに別の意味で神が降りやすくなる「あそびにん」。

大きく分けてこの7種類である。

冒険者を目指すものは必ず一度は教会に行き、神の前にて自分の進む道を選ぶ、そこで契約することによって「加護」の力を強くするのである。

契約といっても難しいものではなく、神父の前で宣言し、それを受け取った神父が宣言したものにありがたいお言葉を与え、一枚の紙切れを渡すことで契約が完了する。

この紙切れ、常に所有者のLvを示すものであり、魔物との戦いによってLvが上がると書かれている数字が変わるので、自分の「加護」が今どのくらいの強さになっているのかがわかるという仕組みだ。

これは（俺の中ではすでに敵として認識されている）Lvの概念を見つけた学者が作ったものらしい、本来なら神父の言葉で契約は完了なのだが、Lvを知ることができるのは便利なことなので渡すのが慣習化したようだ。紛失すると再配布には10Gかかる、神が直接関与していないものとはいえ教会の方々も人の子ということだ。

少し話がそれてしまったが、しょくぎょうを選ぶ上で一番気を付けなければいけないのは、一度選択したものを変えることはできない、ということである。

せんしにしたけどやっぱり呪文を使いたいからまほうつかいになる

！という訳にはいかない。

昔酔っ払ったおっさんが、「30歳を越えた独身男性は皆まほうつかいになる。」と涙ながらに言っていたのを聞いたことがあるが、ただの迷信らしい。ずっとせんしのままだった。

安易に選んでしまう人も少なくないようで、結果的に自分の思っていたものと違い、こんなはずではなかった…と戦うことを諦めてしまふ人もいるそうだが、なので慎重に考えたほうがいいと母さんに言われた。

ちなみに父さんの話によると、世界のある場所にはダーマという神殿があり、そこではしょくぎょうを変えることができるそうなのだが、しょくぎょうを変えるとLvが強制的に1に戻されてしまう上に、神殿の場所も結構人の寄り付かないところにあるらしく、現実的な方法ではないらしい。そしてなによりも、

「中途半端でやめるくらいなら最初から選ぶなと俺は言いたい！」

父さんはダーマ神殿否定派であるらしい。

俺は父さんと同じとうごくになるつもりである。理由としては戦い方が同じな方が学びやすいと思ったのもあるが、実のところ消去法だったりする。

まほうつかいは俺では全ての魔法を覚えられないから断念、そうりよも同じ理由、何より俺は神にいい印象がない。

あそびにんは論外、なろうものなら母さんが泣く、しょうにんは別に商売がしたいわけではないので却下。

せんしとぶとうかは迷ったのだが、せんしは速さ不足、ぶとうかは装備の軽さなどから選択肢より消えることとなり、一番安定していそつなとうぞくを選んだのである。

それは安易な選び方ではないのかと突っ込まれそうだが、自分なりにじっくり考えた末の決定なので問題はない。

さて、呪文は確かに便利であり、強力な手段ではあるが万能ではない。

無限に使用できるわけではないし、ある程度強くならいと呪文も覚えていかない。

肉体の強化も弱く、使える呪文も少ない。

まほうつかいになった人達が一番初めにぶつかる壁がそれだそうである。

そこで呪文の力を過信しすぎるのは危険だという考えが広まり、人間は「加護」をもっと有効活用できないかと試行錯誤を重ねた。

そして作り上げたのが「特技」である。

その特徴は「加護」を部分的に強化し、特殊な力を引き出すというところにある。

例えば、現在とうぞくにとって必須スキルと言われているものの中にタカのめ、とうぞくのはな、しのびあしがある。

タカのめは、視力強化により近くにある建造物を探し当てる特技。とうぞくのはなは嗅覚の強化をし、周囲の宝を察知する特技。

しのびあしは、足元に「加護」の力をまとい、足音を消すことによって魔物に気づかれにくくなる特技。

特技と呪文の大きな違いは、特技は努力さえすれば誰でも覚えられるところである。

盗賊の必須スキル3つも、頑張れば他の職業でも習得可能なのである。

しかも習得にLvが関係しない、使えるようになるかは本人次第で、Lvが上がり「加護」が強くなれば威力も一緒に上がっていく、といったところである。

もちろん適正、というか覚えやすさはある、タカのめなんかは同じく目がよいしようにんは覚えやすいが、そつりよあたりは覚えづらいそう。

更に世界には、強い「加護」の力を利用したり、複数の特技を組み合わせた奥義を使う人達もいると聞いたことがある。これは基本的に開発した者オリジナルの技になることが多い。

というのもほとんどの人が使い方を秘匿してしまったため、後に伝わらず消えてしまうからだ。確かにせっかく開発した自分だけの技を他の人にも使われてしまうのは悔しいかもしれない。

さつきは奥義について聞いたことがある、と言ったが、実は父さんと母さんも奥義持ちだったりする。

父さんは「盗む」を昇華させた「ぶんどる」。

これはとうぞくのはなを魔物に使い宝を持っている相手を特定し、タカのめにより宝の位置、魔物の弱点を探し出し、速攻で相手に致命傷を与えつつものを盗む、というもので、父さんいわく「別に誰でも使える」ということなので秘匿はされていないのだが、戦闘中瞬時にその判断を行えるものはおらず、結果オリジナルの奥義のようない扱いになっている。

母さんは自らが開発した「燃える水」と呼ばれる液体が入った小瓶を敵に投げつけ、メラによって発火、爆発させる「ボム」を使う。

当初本人は、「四肢粉碎灼熱爆発地獄火炎瓶」という名前を付けたそうなのだが、周りの強い反対により変更したらしい。周りの人達の苦労がうかがい知れる。

もちろんボムもオリジナルになっている、燃える水の製造技術は母さんしか知らないし、投げた小瓶にメラを当てる技術など難易度が高すぎるのである。

二人からそれぞれ奥義を教えると言われていた、だがとうぞくはメラが使えない、なのでボムは断ったのだが、

「えー、いっつもパパばかりずるーい！いいもん、私はアリストちゃんに教えるからー！」

とアリスト強化計画を発動してしまった。

アリストはしょくぎょうとしてはまほうつかいになりたいそうなの

だが、Lvが際限なく上がるならそれを活かしてみればどうだと母さんに言われ、剣士としても戦闘を行えるいわゆる魔法剣士を目指すそうだ。

近接においては剣による戦闘、遠距離においては呪文を使った攻撃、中距離ではボムを雨あられのように降らせ魔物を殲滅するアリスト…想像すればするほど、俺アリストと友達でよかったと思う。

「…ふう」

今まで読んでいた本を閉じ、一息つく。あれ？なんかこの始まり方デジャヴ？

本の表紙を見ると「腐った死体も3日でわかる！初歩の呪文・特技レイ著」と書いてある。

母さんはネーミングセンスがないのか？確かにわかりやすかったけども。

ここは俺の部屋、本日は勉強の日で、戦う技術は必要だけれども知識がないと応用が効かないということで行なっている。

母さんが書いた本は題名はともかく中身はしっかりしているので読んでおいたほうがいいとは父さんの談。

肝心の本人は直感が服着て歩いているよう人間なので勉強は全くなかったらしいが。

ふと横に目をやると机に顔を突っ伏したまま夢の世界に旅立っているアリストを見つける。

「んにゅ〜…えへへ、ウィル〜…」

よだれを垂らしながら幸せそうな顔をして眠りこけるアリスト、こいつ実はかなり勉強が苦手である。表紙でまばたきの回数が増え、目次で目がトロンとなり、数ページ読み進めるまもなく意識を失ってしまう。

未来の魔法戦士がそれでいいのか？てか俺は夢のなかでどうなっているんだ。

そんなことを考えていると扉が開かれ、母さんが入ってきた。

「お茶入れてきたから休憩にきなさい〜、って片方はすっかりお休みみたいね〜。…アリストちゃん？」

と言われると急にビクン！と反応し、起き上がるアリスト。

「ん〜…、あれ？ここはどこ…？」

どうやらまだ寝ぼけているようである、体だけが反応するとは、いたい二人の間に何があったんだ。

「あれ？ウィル？ここどこ？確かさっき二人で教会に行ってたはずなんだけど…。」

「まだ寝ぼけてるのか？ずっと俺の部屋で勉強してたじゃないか、主に俺一人が。」

なんだ早くもしょくぎょう選ぶ夢でも見てたのか？と聞くとえ？あ、うん、そうだよ！と顔を真赤にしながら言うアリスト。恥ずかしい夢だったのか？でもお前はもっと目の前の問題に早く気づくべきだと思っんだ。

「アリストちゃん、寝る子は育つから寝るなとは言わないけど、時と場所を選ばないとね。さあちょっとこっち来ましようか。」

母さんを視界に入れ、いつもより間延びしたその言葉を聞くと同時に顔が真っ青になっていくアリスト。

「れ、レイさん！？いえあのこれは違うんです！話を聞いてください！え？聞くからこっちに来なさいって？い、いやそういう意味じゃなくて！ウイル！助けて！ってなにお茶飲みながら遠い目で窓の外見つめてるのさ！？お前のことは忘れない？ひ、ひどいよ！いたっ！わかりましたレイさん！行きます、行きますからお願いだから耳引つ張らないでー！」

ウイルのうらぎりものー！という声を最後に部屋を出ていく母さんとアリスト。

一応あいつはよそ様の家の子供のはずなんだが、最近扱いに容赦がないな…強く生きてくれ。

ま、もう本当の家族みたいなもんだし遠慮はなくてもいいってことか。

さて、次はなんの本を読もうかな、「あそびにんをけんじやにする
100の方法 レイ著」、すごくどうでもいい内容っぽいけど息抜
きにこれにするか、題名についてはもう気にしたら負けな気がする。
なんかすすり泣く声が向こうの部屋から聞こえてくるような気がする
けどきつと空耳に違いない。
そうして俺は再び本を読みはじめるのだった。

第七話（後書き）

というわけで説明回でした。できるだけ考えましたがきつと矛盾出てくると思いますのでご了承ください。この小説では特技についてはしょくぎょう固有にはしません。主人公強化できないので。

そして日常書くのが楽しい、なぜバトルありにってしまったのか。次回はおそらくまたレイさん無双になるきがする…。

第八話（前書き）

今回攻略サイト見ながら書きましたが、間違いありましたら指摘お願いします。

第八話

なんで… どうしてこんなことになってしまったんだ…

ここは薄暗い地下室。

周りは全て石造りの壁に囲まれ、陽の光が全く差しこまない部屋の中でロウソクのみが頼りなく揺らめいている。

殺風景な部屋の中にはほとんど物がなく、壁にはロープが数本括りつけてあり、不気味な印象を醸し出している。

そして今俺はこの部屋の中で起こった惨劇に圧倒され、体を動かすことも出来ず立ちすくんでいる。

床には俺の父だったものの、そして親友だったものが横たわっている。父ロック、友アリスト。

二人とも少し前までは元氣な姿でいつもの生活を過ごしていたはずだったのだが、いまや父は体中をビクンビクンと痙攣させながら白目をむき泡を吹いている。

友はうつぶせの体制のままピクリとも動かない、息はしているのでなんとか命はつないでいるようだ。

この地下室には扉が一つしかない、まるで入り込んだものを決して逃さないと言わんばかりに。

そしてその扉の前にじごくのもんばんのごとく立ちふさがる黒い影。

「うつぶ〜、さあ後はウィル、あなただけよ。」

我が母、レイがその手にロープを持ち微笑を浮かべながら立っている。

本当にどうしてこんなことになってしまったんだろう…

時は少し遡る、俺とアリストはいつものように部屋で勉強をしていたのだが、急に母さんが。

「ちょっと二人ともこっちに来てくれないかしら。」

といつも調子で呼んだので、居間に行くと、こっちこっち、と俺達を押す形である部屋の前まで連れていった。

そこは家にある地下室の前、ここは昔母さんから立ち入り禁止令が出ていたため俺は今まで入ったことはなかったのだが、アリストは知っていたらしく。

「ヒイツ！？こ、ここは！？今度は何をするつもりなんですか！ボクまじめに勉強してましたよ！？」

とものすごい拒絶反応を示していたことからおそらくここはお置き部屋なのだろう。

というかなぜ今回は俺まで？別にいい子であったとは言わないが特に悪いことをした記憶もないんだが…

だがアリストほどではないがこの部屋は危険な気がする、入ってはいけないと俺の中の本能が告げている。

正直逃げ出したかったのだが、母さんに押される形でここまで来たので後ろに母さんとアリストがいる、つまり動くに動けない。どうしたものかと悩んでいると背中を押され、部屋の中に強制的に入室させられた。

バランスを崩し倒れる俺、そしてその上にかぶさるように同じく倒れるアリスト。

「いたた…、大丈夫、ウィル？」

「ああ、大丈夫だから俺の上からどいてくれ。」

「あ、ごめんね、すぐよけるねって…上？あれ？この体制…もしかしてボク今ウィルの上で…」

急にぼそぼそなにか言いながらうつむくアリスト、いいから早くどいてくれ。

立ち上がり初めて入った地下室の中を見回すと気になるものを2つ見つけた。

ひとつは天井からぶら下がっている「レイのぱーふえくと呪文教室」と書かれた垂れ幕。

そしてもうひとつはその下にロープでぐるぐる巻きにされて転がっている父さんである。

全く状況が飲み込めずばかんとしていると母さんが宣言した。

「今日は普段の勉強の成果を確かめるために試験をします。」

時たまこうしてどれだけ学習した内容が身についているのか確認するのは気を引き締める意味でもいいことらしい。

抜き打ちになったのはたまたまさつき思いついたからだそうである。

「なるほど、それはいい考えだな。それで俺はなんでこんな所に縛られて転がされてるんだ？」

父さんが言う、確かに試験をするだけならここにいる意味はないはずだ。

「うふふ、それは、これのためです。」

そう言うて懷から小瓶を取り出す母さん。

中には何やら液体が入っているのだが、色がおかしい、虹色に輝いている。あんな液体この世に存在していいものなのか？

しかしそれを見た瞬間父さんとアリストの動きがピタッと止まる。

「ま、まさか……。」

「それは……。」

妙に汗をかいて焦りだす二人、それに答える母さん。

「そうです、先日とうとう完成した私特製ドリンク、その名も虹色七号です。」

小瓶の中を軽く揺すりながらにこにこと言う母さん。中の液体が揺れるたびにキラキラと光っている。

ん？七号ってことは――六号もあつたのか？

「あつたわよ、ね？パパ、アリストちゃん？」

その言葉に煤けた顔であ、ああ…、そうですね…と答える二人、どうやら聞かないほうが良かったようだ。

で？その虹色七号をどうするの？

「決まってるじゃない、パパにはこれを飲んだらどうなるかじつに…問題不正解者がどうなるかを見せてあげようと思つて。」

「今完全に本音が出たよな！？ていうか本音じゃなくても俺がひどい目にあうことが決定してるじゃねえか！？」

離せ！と体を動かし拘束から抜けだそうとしている父さん、言っちゃ悪いが芋虫みたいだ。

「無駄よ、そのロープ意思があるから、それにパパも問題に正解すればいいだけの話しよ。」

なるほど、父さんにも救済措置があるわけか。

というかなんだ意思のあるロープって、後で聞いたら昔錬金術にはまっていた時に作ったものらしい。本当に何者だこの人は？

「問題は全部で5問、全て呪文関係の問題で1問でも間違えたらその場で失格となりまゝす。」

「よし、俺は逃げない！どこからでもかかってこい！」

おお、格好いいぞ父さん、芋虫状態でなければ。

「では第1問、氷結系の一番初步の呪文の名前は？」

「ブリザドだ！」

……。時間が止まった。

「はい不正解です。では実験、もとい罰ゲームです。」

「もう実験を否定する気すらないのかよ！？ってちよつと待て！俺間違ったのか！？あつてるだろ！？や、やめろ…来るな！ぬわー！
—————！！！」

まるで息子を人質に取られ身動きがとれなくなったところにメラゾーマを食らったような悲鳴を上げ倒れる父さん、いや、息子健在だけぞ。

「さーて次はアリストちゃんの番ね。」

そう言われ恐怖が身を包んだのか下を向くアリスト、しばらく何かを考えていたようだ、顔を上げると何かを決意したような顔で俺の方を向いて言った。

「ねえウィル…ボク、ここから無事に帰ることができたら君に伝えたい言葉があるんだ、聞いてくれるかな…？」

急に言われて思わず、お、おうと答え、それを聞いたアリストが母

さんの方に向き直り、お願いします！と言った。

というかアリスト、その言い回しはとても危険な香りがする。生存率がほぼ0%になりそんな意味で。

「第1問、まほうつかいが最初に覚える呪文は？」

「メラです！」

「せいかゝい！では第2問、爆発系の初步呪文は？」

「イオです！」

立て続けに2問正解、いい調子だ、頑張れアリスト！

「では第3問、氷結系の呪文は全部で何種類あるでしょう？」

「えーと、氷結系はヒヤド、ヒヤダルコ、マヒヤドだから…3種類です！」

…あ。

「不正解、ヒヤダインを忘れてます。」

そうなんだよなー、なぜか氷結系は4種類あるんだよな、しかもヒヤダインのみ効果範囲が広い。

それにして二人とも氷結系の問題で失格とは…きつとトラウマになるに違いない。

逃げてても無駄と判断したのか母さんから小瓶を受け取るアリスト、その顔は捨てられた子猫のようである。

最後にちらつとこっちを見て、ボクと友だちでいてくれてありがとう…と言つと中身を飲み干し、そのまま倒れ物言わぬ物体となった。

そうして冒頭に戻るわけである。

先に犠牲になった二人の様子を見るにアレは人が手を出してはいけないものに違いない、なんとしても正解しなければ。

幸い初めての試験だからかはわからないが、そこまで難易度の高い問題は出ていない。普段勉強しているなら平気なはずだ。

「では第1問、とうぞくがフローミを覚えるLvは？」

「Lv10だ！」

「正解、では第2問、爆発系最強の呪文は？」

「イオナズンだ！」

「正解、ウィルには簡単すぎるかしらね、では第3問、スクルトの効果と覚えるしよきよう、Lvを答えなさい。」

難易度が急に上がった！？いきなり3つも答えなければいけないとは、てかこれで3、5問でいいじゃん！
だがまあこのくらいならまだ大丈夫！

「効果は味方全員の守備力上昇！覚えるのはまほうつかいとけんじ

「や！Lvはどちらも9だ！」

「せいかりい！さすがねウィル、母さん嬉しいわ。では第4問、ルーラとリレミトの違いを説明しなさい。」

お、ちょっと易しくなったな、旅人の必須呪文を間違えようもない、とうぞくは覚えなないけどね！

「ルーラは訪れたことのある町に一瞬で移動する、リレミトは洞窟などから瞬時に脱出する！」

「正解、ちなみに洞窟でルーラ使つと頭ぶつけるから気をつけてね。」

パパとママは洞窟で頭打って倒れてたママをパパが助けてくれたのが出会いなのよ、と二人の馴れ初めを語ってくれた。

なんというかも言葉に出来ない！母さんのことだから頭を打ったのは初めてではないはずだ、だからちよつとネジが外れてるのか？

「なんか今失礼なこと考えてたわね？では第5問、ニフラムとバシルーラの共通点を述べなさい。」

うおっ！心を読まれたのかいきなり難易度上がりすぎだろ！？しかもなんだその問題、全くわからんぞ！？

待て待て、落ち着いて考えよう、まずは2つの呪文の効果は…ニフラム…聖なる力で敵を消し去る。バシルーラ…敵をどこかへ飛ばす。だったはずだ。

覚えるのはLvは違うもののそうりよとけんじゃ、これは一瞬共通点かと思っただ、ニフラムはゆうしゃも覚えるはずだ。

なのできつと引っ掛け問題になっているはず、だまされないぜ、母さん。

ならば効果か？だがニフラムは敵を消すのに対しバシルーラはどこかにやってしまっただけ、根本が違う。

…ん？根本？

そういえば2つとも戦闘を強制的に終了させる効果だよな？でも2つとも実際に戦闘を行うわけじゃない…そこから導き出される回答は…

「わかった！2つとも魔物と戦った経験にはカウントされない！」

「せいかゝい！結構悩んでいたみたいけどよくわかったわね、偉いわよ。」

そう言って抱きしめられ、頭をなでられた。ちよつと気恥ずかしいが褒めてくれたことは嬉しい。

そしてなにより虹色七号の餌食にならずに済んだ自分に心から賞賛を贈りたい。

これからも気を抜かずに勉強は続けることにしよう。

「さあ、おやつも用意してあるしそろそろ休憩にしましょうか。」

そう言っただけで部屋から出ていく俺と母さん、今日のおやつはいつもより美味しく感じられそうである。

地下室に取り残された2つの物体、その片方がうめき声のようなものを上げた。

「アリスト…生きてるか？」

「はい、なんとか…。」

「なんで俺はこうなっ たかいまだに分らないんだが…。」

「ロックさんはせめて氷結系くらいは抑えておいたほうがいいですよ、人のことは言えないけど…」

二人の男たちが、氷結系を極めようと決心した日でもあった。

第八話（後書き）

という訳で試験編でした。

レイさん当初こんなに強力なキャラではなかったんですがいつの間にかこんなことに。

そろそろ戦闘訓練もはじめられと思います。

冒険は…まだ先かなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8167y/>

Lv20

2011年11月26日19時06分発行